

度重なる水害と その克服のために

松江は水に囲まれた地域です。そのため、明確な記録が残る江戸時代以降でも、数限りなく水害、特に洪水に襲われました。災害の歴史は『松江市史史料編 1 自然環境』の第2章第3節「松江における気象災害」に詳しくまとめてありますので、ぜひご覧ください。

1. 古代の洪水

発掘調査で知る水害 さて、記録が残っていない（少ない）中世以前の水害を知ることとはとても難しいことです。一方で手掛かりが全くないわけではありません。その一つが発掘調査です。近年の豪雨災害で、街中や耕作地に濁流が流れ、そのあとに土砂が溜まっている映像をよく見ます。このような大規模な水害があると、発掘調査でその痕跡が見つかることがあるのです。

水田跡の発掘調査 時々、先史時代や古代の水田の跡が見つかることがあります。具体的には畔（あぜ）が見つかるのですが、なぜわかるのか不思議に思いませんか。低い畔や場合によっては足跡まで見つかることがあるのは、洪水でその上を一気に砂が覆ってしまったからです。当時の人々にとって悲劇的な出来事が、皮肉にも後世の私たちに具体的な水田耕作の在り方を考える手がかりを残してくれるわけです。

松江市内で古代以前（弥生時代～平安時代）の水田は意宇川が流した土砂で形成された、市街南郊の意宇平野で多く発見されています。そもそも松江市内には流域面積の大きい川は少なく、意宇川が最大の流域面積を持つことにかかわりがあるのでしょう。結果的に



竹矢町向小紋遺跡での水田跡検出状況
洪水砂層を剥ぐと、田の畔が白く見えている
（島根県埋蔵文化財調査センター提供）

一番大きな平野を形成しているわけです。竹矢町の布敷遺跡、神田遺跡、上小紋遺跡などからは、砂に覆われて水田が見つかっています。弥生時代に何度か洪水に襲われていることが分かります。一方、小規模な平野や谷筋でも洪水は頻繁に起きていたようで、鹿島町南講武氏元遺跡では洪水で埋まるたびに水田に水を流す水路を作り替えている様子が分かっています。

2. 中世の水害

ところで豪雨も度を越えると、中流・上流で土砂崩れや地滑り、山津波などが各所で起こります。これらで流出した石や土砂が大規模に流出すると、下流にまで土石流を押し流すことがあります。そのような痕跡が、大草町の史跡出雲国府跡の発掘調査で見つかっています。水田だったところを掘り進めると、まず丸い礫や砂が溜まった層が現れます。結構固くて掘るのに苦労をするのですが、これを掘り下げないと古代の層は出てきません。この砂礫層からは土器や中国から輸入された青磁、白磁などが混ざって出てきます。その年代から、12～13世紀の中世ころに起きた土石流の跡だと考えられています。この砂礫層以降には建物などは見つからないため、水田化して国府の機能も停止したものと推測されています。ちなみに、この頃から竹矢町、八幡町周辺に寺社が集中していきますので、国府の後を引き継いだ中世府中の中心は、災害を機に移動したものと考えられます。文献では知ることのできない、大災害です。



出雲国府跡で見つかる洪水による砂礫層
(奥の一段高い部分の礫が中世前半に堆積した礫です)
洪水砂層を剥ぐと、田の畔が白く見えている
(島根県埋蔵文化財調査センター提供)

3. 江戸時代の水害

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後に、徳川家康により藩が置かれ、堀尾氏が松江藩主に任ぜられて以来、各藩は自国の出来事を幕府に報告しなくてはなりませんでした。そのために、出来事の詳細な記録が作成されたと考えられます。松江藩では、松平家二代藩主綱隆から藩主年譜が編纂されていて、それを見ると松江藩で起きた災害についても、かなりくわしく知ることができます。

藩主年譜からみる水害 現在確認できる寛文10年（1667）から嘉永5年（1852）の間に、大水害、洪水、風雨、甚雨、大雨といった水害を表す記録は、実に52回を数えます。単純に年数から割り戻すと3.5年に1回は記録的水害があったことになります。この数字を単純に現代に当てはめることはできませんし、松江藩領での出来事ですので必ずしも松江に被害があったとは限りません。しかし、相当に水害に悩まされていたことは間違いありません。洪水対策のために天神川や佐陀川の開削が行われたのは、「ストーリーⅢ（4.）」で取り上げたとおりです。

延宝二年の大水害 被害状況の記し方はさまざまですが、たとえば記録の2番目、延宝2年（1674）6月の「大水害」には次のように記されます。

「25日国内大雨、松江が最も甚だしく、宍道湖と周辺の川が満ち、26日水平地に溢れ8～9尺に及ぶ、27日になり水の勢いいよいよ甚だしく溢れ、荒合堤を越え、28日大橋は半落し、天神橋は流れ、その他、石橋・土橋・独木橋の類いは壊れ落る。」

具体的に被害の大きさを記しており、「男女溺死者229名、牛馬103頭溺死する。」と、その悲惨さが記されています。一方で、城下町では船で避難したり救助をしたりする様子や、その後の被災者への炊き出しも記載されています。そして最後に

「但し、城下においては1人も溺死者なし。」

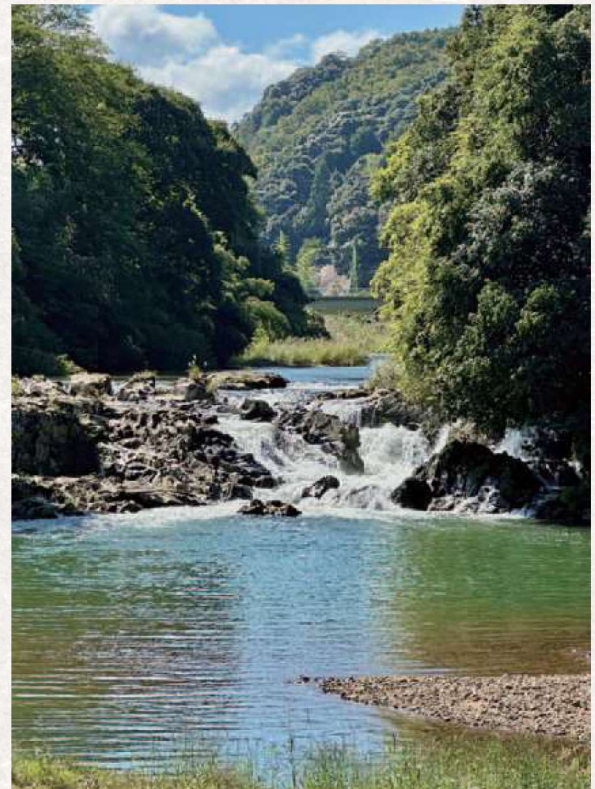
と記されているのです。おそらく松江城下町では、度重なる水害の中で、互助共助による避難救助や被災者支援が行われるシステムができていたのではないのでしょうか。また、松江城下町は流域面積が大きい河川は直接流れておらず、斐伊川はじめ周辺の河川が氾濫したのちに宍道湖に流れ込みます。宍道湖が一定の洪水調整の働きをし、城下町に溢れるころには流れはある程度緩やかになって、避難の時間確保と舟の航行を可能にしていたとも考えられます。

周辺地域の被害対策（日吉の切通し）

一方現在の松江市内で最も流域面積の広い意宇川周辺では、大きな被害があったことは想像に難くありません。八雲町日吉の南で大きく蛇行していた意宇川を、剣山を切り割って直線的な流路とした「日吉の切通し」は、水害による被害を抑える目的で掘削されました。慶安三年（1650）に藩によって開削されて以来、一度戻った流路を18世紀に周藤弥兵衛（すとうやへい）とその子孫たちによってふたたび切り開かれ、現在も意宇川の流路のなかで渓谷景観として生き残っています。切り通した箇所は硬い岩盤で、当時の人力だけによる作業の困難さがしのばれる文化遺産であり、歴史的景観です。



日吉の切通し（南から）



日吉の切通し（北東から）

4. 明治以降の水害

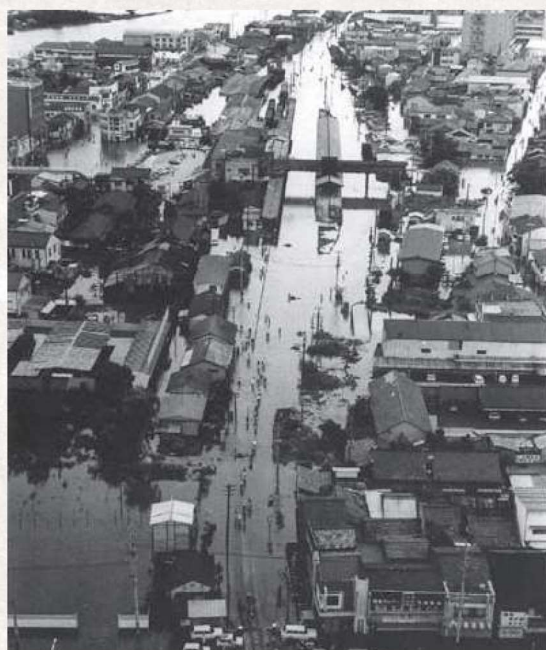
明治26年の大洪水 明治に入って最大の水害は、明治26年（1893）10月の大洪水です。この年はちょうど乃木福富に区内観測所が設置されており、10月10日以降17日までに419mmの降水量を記録しています。「山陰新聞」によれば、10日より降り始め、13日には低地の石橋町、田町などで浸水、14日には京橋川があふれ、16日ころに深さ九尺に及



明治26年の大洪水後の石垣修復
（松江歴史館蔵）

んだといひます。18日朝にようやく浸水深さが減って八尺となったとあり、松江市街地はゆっくり水に浸かり、ゆっくり水が引いたことが分かります。西田千太郎（ラフカディオ・ハーンと親交が深かった島根県高等尋常中学校教頭）が残した日記によると、避難者は数千人以上に及び、「延宝二年の洪水以来曾てなき所なりという。」と記しています。先の1674年の大洪水を引き合いに出して、惨状を嘆いているのです。一方で死者の記録がないのは驚きです。

昭和47年の大洪水 戦後最大の水害は、47豪雨（よんななごうう）として語り継がれる昭和47年（1972）の大洪水です。活発な梅雨前線が停滞し、南側から湿った空気が流入して起こった、今でいう梅雨末期の大雨に襲われたのです。この大雨で松江市街のほとんどが水につき、床上浸水6,084棟、床下浸水14,496棟、耕作地1,763ヘクタールが長期にわたって冠水するという大災害となりました。それでも死者が1名というのは、近年の同様の豪雨災害と比べると驚くべきことです。



昭和47年7月水害 松江駅付近
（『松江市史 通史編5 近現代』より）

松江市街地の水害の特徴

松江市街地とその周辺の大規模な水害の多くは、宍道湖が増水して溢れ出ることで発生しています。これは、斐伊川をはじめ多くの川が宍道湖に流しだす水量が、大橋川が中海に向かって排水する量をはるかに超えることで起こっていました。宍道湖の西から東まで、勾配はわずかで、流れるスピードも緩やかになります。

大橋川は、西は松江大橋付近で、東は矢田の渡し付近で最も幅が狭くなっており、その部分の流出量で宍道湖の排水は制限されます。いわゆるボトルネック効果というものです。特に、降水量が多いときは、矢田では松江大橋付近とほぼ変わらないくらい水位が高く、下流の八幡町では大きく水位が下がっているというデータがあります。中海に流れ込む手前の大橋川が狭い部分（『出雲国風土記』でいう「朝酌促戸」）、つまり矢田から八幡間で排水が滞る現象が起きているわけです。

斐伊川・神戸川治水事業

頻発する松江の水害を防止する根本的な対策として、斐伊川の水を西側の神戸川に放水する計画が構想されました。昭和40年に建設省（当時）が放水路案を発表して以来、検討が進められ、先の昭和47年豪雨をきっかけに計画が加速しました。



斐伊川・神戸川流域の治水計画の概要
 (国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所 HP より)

事業は大きく三つの対策工事が計画されました。一つは、斐伊川・神戸川の上流に治水用のダムを建設する事業。二つ目は、斐伊川が宍道湖に流れ出る手前で、その水を神戸川に分流して排水する放水路事業。三つめは大橋川を広げて、宍道湖から中海への排水量を増やす拡幅事業です。この3点セット事業で、宍道湖・中海を含む斐伊川と、神戸川の総合的な安全性を高めようとするものです。

すでに上流の志津見ダム（神戸川上流）と尾原ダムは、平成24年（2012）に完成、斐伊川放水路も平成25年（2013）に完成をし、現在最下流の大橋川の拡幅を中心とした大橋川治水事業が進められつつあります。この大規模な治水事業が完了すれば、松江市街地やその周辺で宍道湖があふれる可能性は相当に低くなるものと想定されています。

5. 水害の変化に対応して

近年、日本の各地で水害が激甚化しています。突然、短時間に大量の雨が降る「ゲリラ雷雨」、長時間にわたって特定地域に大雨が降り続ける「線状降水帯」といった新しい気象用語の登場がそれを表しています。台風の発生も多くなり、勢力が衰えないまま上陸・接近することで、大きな被害が起きています。幸いにも、近年松江では死傷者が出るような水害には見舞われていません。先人たちのたゆまぬ努力のたまものでもあるでしょう。

しかし、想定を超えた災害がどこに起きるかは、誰にもわかりません。水に恵まれているからこそ、防災の意識を高めることが大切でしょう。